

---

# おれたち演劇部！！

柊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おれたち演劇部！！

### 【Nコード】

N8041Y

### 【作者名】

柊

### 【あらすじ】

演劇しない演劇部がめずらしく演劇しようとする話

お待たせしました演劇部！

どうもいきなりですが演劇部です。

いつもの現状確認タイムスタート

部室の扉をあける 中に入る もう板倉と部長がいて、遅いと怒られた なんと入部してから2週間初めての真面目な部活とな！（部長がいきなり言いだした） 今ここ

ただ今ON THE イス

今日はイスを横一列に並べ、部室に置いてあるホワイトボードとその前に立ち説明をしようとする部長に向けられていた。

「一体何をするんですか部長！」

思わず興奮してしまう俺

「それを今からいうって言うてんでしょうが！」

部長に怒られてしまった

「まったくほんとだよ、それに興奮していると顔が気持ちわるゲフンゲフン」

せきが明らかにわざとだったよ、ムカつくのがわかってやってるのであえてのスルー

「それじゃあ説明するけど今日はちょっとしたオリジナルの物語の台本を作ってもらっわ」

「それって結構難しくないですか？」

うんうんそうだと思う

「確かに…」

あ、板倉の声初めて聞いた気がする。（ちなみにずっとゲームやってた）

「別に今すぐってわけじゃなくてね、一週間ぐらいかけてじっくり作ってもらってもかまわないしそれはどうでもいいけどこっからが詳しい条件ね、その一 必ず面白おかしいハッピーエンドにすること、例えば何かをモデルにしたとしてシェイクスピアの四大悲劇

でもね、その二 必ず役の数は五人にすること、これは一番優秀だった作品はみんなで演じるからね、期限は一週間以内にか文句あるでもある？」

なるほど、なんか行けそうな気がしてきたぞ。

「すいません、あまり関係はないのですがなぜ今になってなのでしょうか」

「まあそれともっともよね、じつはね」

おお！一体どんな秘密が隠れているのだろうか！

「それは……」

いやがおうにも皆は期待し、緊張感が高まる中に出た答えとは！

「何となくよ」

シーンとした空気。

「ええー！」

あまりの驚きに席を立った俺

「な、なるほど」

実は納得してなさげな颯太

「この引きでそれはないわー」

まさかのことに思わず突っ込みを入れる鬼頭

「…（ちよつと引きぎみ）」

ちよつと引いた板倉も合わせてそうずつこけだった。

「なんかもつとこの二週間みんなの結束力を試していたのよ的なきれいな落ちはないんですか！」

うんうんとこの時ばかりはみんなの気持ち一致した。

「私の気分と言い換えてもかまわないわ」

「こつちがかまうんですが…」

「ああもう、うだうだうつさいわね、時間無くなっちゃたじゃないの！じゃあ宿題頑張ってね！」

まだ釈然としないんだがなあ

「はい解散！」

お待たせしました演劇部！（後書き）

今日も頑張ってこー

お便り待ってまーす

これの前に短編でキャラとか紹介してるんでそっちもお願いします

## 頑張らNIGHT演劇部！！

どうもいきなりですが演劇部です。

夜の六時、今は自分の部屋で演劇部の宿題に悪戦苦闘中。

「おもしろおかしくハッピーエンドで役の数五人ねー」

やっぱり結構むずくない？

「あ、そうだ」

こんな時はみんなに相談だよ

「えーっとまずは誰からにしようかなーっと」

世間話に織り交ぜてメールでみんなに聞いてみた。

……………二十分後……………

結果発表タイム、パチパチパチ、という自演の後。

颯太「もう出来たと言うのであらずじを送ってきたのだがくそ真面目な文学すぎて、これ条件に合っていないよ、と返しておいた。

板倉「返信なし

鬼頭「何を言ってもふざけた返信ばかりで、情報収集にかかったほとんどの時間をこいつに費やした（十五分近く）結果得られた情報はできてないということだけ。

俺「何も得られてない

「何の意味もねえ！」

一体俺は何をしていたというんだ、何の意味もないじゃないか。

「落ち着けもつとクールになれ俺！」

よし何とかなったぜ、これは自分の力ですべてを乗り越えろという神からの啓示のはずだ。

「そう考えるとすらすらと考えが思いつく！」

サラサラサラーっとな。

「何だこれは！自分で驚いてしまうほどの出来栄え！」

俺の才能よなぜもつと早く開花しなかったのだろうか。

「この喜び誰かに伝えずしておくべきか！」

ピポパピポパーってね。

「一体こんな時間に何用かしら？ 俵君、私すくごく眠いんだよねー」

ちなみに今夜中の一時、ちょっと怒ってるのもそのせいだが俺としてはどうでもよく、この話を誰かに聞いてほしかったのである。

「部長！」

「ちょっといきなり大きな声出さないでよね！」

「あ、すいません。でもそんなこったどうだっていいんですよ部長！」

「私としてはそこそこ重要なんだけどな」

小さい声でなんか言っているが聞こえなかったので無視。

「では本題に行きますよ部長！」

ペラペラペラーつとすでに作り上げた台本を説明までしてこの一大ストーリーの説明をした。

…………… 四十分後……………

「ああーまあだいたいわかったわよ」

「で、感想はどうですか」

「一言で言わせてもらおうとね」

ドキドキ ドキドキ

「没」

「なんでえー？！？！？！？！？」

意味がわからないよ！

ちなみに俺の作った物語のあらすじとは。

まあだいたいを簡単に説明させてもらおうと、めっちゃめちゃ壮大な西洋風のファンタジーな桃太郎だな。

ドラゴンとかを味方につけ、魔王軍と戦う！みたいな感じなんだが何がいけなかったのだから？

「お、願います何がいけなかったのでしょうか」

ちよつと声が裏返ったが気にするな。

「全て何もかもが面白おかしくハッピーエンドっていみで私いった

つもりなんだけど」

「だからそうしましたけど？」

「はあ、あなたここまで言ってもわからないの？」

「はい、そうですけど？」

結果魔王軍に勝ちハッピーエンド、何処に不幸な人たちがいる？

「いるじゃないの、惨殺されまくってる不幸なのがたくさん！」

「は？」

おっと、俺としたことが敬語を忘れてしまったようだ。

「だーから！魔王軍よ　ま　お　う　ぐ　ん！日本語わかりますか？」

「ええええええ！だ、だって魔王軍は悪であって退治されてこそハッピーエンドじゃ……」

「その考えが甘いよ、私が一年のころと一緒にね」

まず去年もそんなことやってたのかと。

「まったく、私のしていることも数少ない伝統なのよ。まあそれはいいとして、例えばあなたが魔王……は言いすぎとして身近なところでイニシャルGになったと考えてみなさい」

「イ、イニシャルGに？」

「人が勇者、Gが魔物と考えてね、Gは生きるため仕方がないから人里にすむわ」

まあ考えてみればそうだな。

「でね、家なんて概念はないんだからたまたま入ったところでいきなり殺虫剤かけられたりつぶされそうになったりとたまったもんじやないわよ、人からすればGは倒すべきものなんでしょうけれどね」

「確かにそうですね……」

「でも魔物ならもうちょい頭もいいからここでは終わらないわ」

「それで町や村を襲うんですね……」

「そうよ、あなただって何かやられたらやり返したくなるでしょ、その積み重ねで悪と認識されて倒されたとしたらどうなる？」

「それはハッピーエンドではなくなと思います」



「そういうことよ」

「なるほど」

最初は納得なんてとても出来なかったがよくよく言われてみれば納得のいくことだ。

「あああああ！」

「何ですかうるさいですよ部長！」

「もうこんな時間じゃないの！早く寝なきゃこのバカ！」  
いつのまにかもう三時だった。

「じゃあもう切るわよ！」

「待ってください次の作品へのヒントを何か！」

「もううっさいわね、はいじゃあね！」

頑張らNIGHT演劇部!! (後書き)

短編のほうも読んでくれるとうれしいです

まだやらないよ演劇部！

どうもいきなりですが演劇部です。

そしていきなりですが眠いです。

いきなりですがテンションダダ下がりです。

なぜかって？

それはね。

授業中に物語かいてたら怒られちゃったんだよ。

とうぜんだよね、馬鹿だよね、罵ってくれてもいいよ。

「なにぼーつとしてるんだ、死ぬか部室行かかさつさと選べよ人面魚」

ほんとに罵ってほしかったわけではないんだよ鬼頭。

「ああ行くから待ってくれよ」

というわけで部室へ行くのだが。

……尺の都合上割愛……

扉の前で俺を先頭に後ろに春風颯太（僧侶）、鬼頭廉（アサシン）の体制で魔王城に突入　というわけではなく（昨日の影響が脳内に響いている）、普通に部室に入る俺たち。

「あれ？誰もいないなんて珍しいな」

と、思ったら

「…俺がいる」

扉で隠れていたところから急に出てきたよ板倉怖！

真のアサシンはこいつかもしれん。

「なんでそんなところから？」

あ、たしかにナイス疑問だぜ颯太。

「…日光にあたりたくなくて」

「よし部長あれいなし例あれのやるか」

「ああ例あれのだね？夏」

「じゃあ俺も入らせてもらうよ」

「…俺も」

よし、みんな乗り気だしあれとやらの説明をしておくか。  
これにいくら部長がいらないからといって真面目な颯太が参加するの  
か、その理由はルール説明ではつきりする。

これからやるのはただのゲームそれも大富豪といういたって有名な  
遊びだ。

八切りなどの地域によって違うルールがあるが、ここで適用される  
のは、七渡し 八切り 十捨て Jバックである。

重要なのは罰ゲームというよりも優勝者への褒美である。

駅までの帰り道、優勝者には何でも命令できる特権がついてくる。

駅までの十五分ほどの間には青少年たちの空腹を刺激するものがた  
くさんある。

つまりは言わずともわかるということだ。

一回の勝負ですべてが決まるわけではなく、今回ならば部長が来る  
までである。

「さあ始めようじゃないかこのゲームをなあ」

スタート！！！！

と同時にクライマックス

手札枚数

颯太 二枚

鬼頭 四枚

板倉 三枚

場のカード 颯太の出した三が三枚スペード以外（しょっぱな俺が  
出したから）

俺 十六枚（スペ三ぐらいしか出してない上に七渡しされた） そ

んで今おれの番（順番は俺 颯太 鬼頭 板倉）

「どうせ人面魚はまた出せないんだろ？」

「くつくく、見くびってもらっては困るぜ、おれがただ単に運が悪く出せずに困っていたとでも？」

「うん」

「そうじゃないの？」

「…そうじゃなかったのか」

「ええー」

「ということは手があるんだね？」

「もちろんさ！」

俺の出した手は！

「二の三枚だしさ！」

「なんだとっ！」

「…くっ」

「ということはこの後は、はっ！まさか！」

颯太は何やら気づいたようだ。

「そしてこの後は、六枚革命さっ（十を四枚＋ジョーカー二枚）」

ふっ、みんなの絶望が手に取るように分かるぜ！

「いらぬカード エースやK Qなどをすてていくそして残り一枚  
というところで。」

バンッ

急に扉が開かれた。

「突然だけど今日はもう部活終わりね！遊んでないで早く帰るわよ

！」

「そ、そんなぁー」

「っし！」

みんながガッツポーズをとる音が聞こえた。

振り返ってみてみると。

「ヒューー」

口笛吹いてた。

「はい、解散！」

まだやらないよ演劇部！（後書き）

なんかコツつかめてきた気が！  
短編のほうもお願いします

**明日からがんばる演劇部（前書き）**

今回あんまりおもしろくないです。  
宣言します。



## 明日からがんばる演劇部

どうもいきなりですが演劇部です。  
今の状況はというと。

簡単に言くと、みんな正座して部長に見下ろされてる。

ちょっと詳しく言わせてもらうと、きちんと反省の気持ちを持って  
床に正座し、そこをイスに座り足を組んだ女王さま、おっと間違え  
た部長が空気も凍るような視線で射ぬいています。  
なんでこうなってしまったんだろう。

……ちょっと前……

「ういーっす」

自分でも日に日に態度が軽くなってると思う。

「あれ、また部長いねーな」

「あ、ごめんごめん遅れちゃった」

と、思ったら来た。

「じゃあ今日の活動内容はとりあえずできた物語の発表かな？」

「……へ？」「」「」

空気が凍った。

……ちょっと後……

ああ、そうそうこんなだったよ。

で、今に至ると。

「で、やらなきゃいけないことがあるのにあんたたちは私がい  
ないからって遊んでいたと？」

「「「返す言葉もございません」「」

「まったく、あんたたちはねえ」

何か溜息つかれた

「せめて春風、あんたには物語作るぐらいしてほしかったな」  
ふんっ、言われてやんの曰ころの行いだぜ！（ある意味）

「俵もだけどねー」

え？なんでおれ？

「あーんな大ヒント上げたのにまだ描き終わってないの？」

「う、すいませんでした」

「まあいいわ、もう機嫌悪いからかーえる」  
なんか怒られた時の子供みたいだ。

時間があるからってこれは自分がみじめだ。

やるときやもつと頑張らないと。

「はい、かいさーん」

でも明日からにしようかな？

**明日からがんばる演劇部（後書き）**

次からもつと頑張る。  
でも明日から。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8041y/>

---

おれたち演劇部！！

2011年11月26日21時51分発行